

西吉野

と短歌

なみの亜子あこ



西吉野に住んでいる、と言うと決まって「桜がきれいなんですよ？」などと羨ましがられる。……違います。それは吉野山の吉野のことで、西吉野はそれより北西、和歌山寄りにある別の土地。昔から人心の古里として、また今も桜の名所として名高い吉野に比べると、いろいろと地味で陰影深いところだ。

二〇〇五年に五條市に合併するまでは、吉野郡西吉野村とあった。五條と十津川を結ぶ十津川街道、今の国道168号線沿いにある村の一つで、ここから天辻峠を越えて大塔村、十津川村に至る。「いずれも無数の峰々や谷々をかかえた大村」(司馬遼太郎『街道をゆく/十津川街道』)で、杉や檜におおわれた山々にへばりつくように集落が点在している。西吉野は、山

の傾斜の水はけと朝晩の気温差を活かした果樹(梅・柿)栽培が盛んだ。ここで、村史「西吉野村のあゆみ」をもとに歴史をさかのぼってみる。時は中世。足利尊氏に追われた後醍醐天皇は、ひそかに京都を脱出し吉野に向かった。その途中で西吉野村の賀名生(旧地名は穴生)に立ち寄った、とされる。実際には、高野山に入ろうとして高野山側から拒絶されたため、賀名生を経て吉野に入ったらしい。村史に引かれている「大和国賀名生と云所へぞ落付せ給ける。此所の有様、里遠して人煙幽に、山深して鳥の声も稀なり、柴と云物を囲て家とし、野老芋を掘て世を渡る計なれば……」という「太平記」における賀名生のさまは、西吉野の集落に共通する風情であったと思われる。この後醍醐天皇が数日、後村上天皇が六年、長慶・後龜山天皇が数年間を滞在したとされる家(掘家)は今も藁葺屋根のまま保存され、掘家の子孫となる人々が暮らしている。この家とそれを取り囲む山一面に咲き誇る梅林が、観光名所にもなっている。

山ふかみ人こそ訪はね咲きなばと言ひしばかりの宿の梅が枝

後龜山天皇『新統古今集』

五千本ともいわれる賀名生の梅林は後の世の植林ではあるが、後龜山天皇の歌にはすでに梅の花が印象的だ。しかし、この山深さと世からの隔絶感が、権力を追われた帝の歌に影を落としていることも見逃せない。西吉野であつて吉野ではない、というこの違いは、決して小さくなかったはずである。

この賀名生の掘家には、吉村寅太郎の筆による「賀名生皇

居」の扁額が掲げられている。幕末に尊王討幕を目指して騒動を起こした、あの「天誅組」の吉村寅太郎である。文久三年（一八六三）、大和で決起した天誅組は、当時の天領であった五條（旧表記では五条）の代官所を襲撃。すぐに暴徒として追討の身となる。吉村らは五條から天辻峠へ逃れ、ここを砦に尊王の志の高かった十津川郷士を募り戦うが、やがて潰滅。騒動の間、五條と天辻峠の間にあった西吉野村は、炊き出しや人足のかり出しにひたすらな迷惑を被り、戦鬪の被害にもあった、という。賀名生の「皇居」には扁額のほかに天誅組の寄せ書きも残されたというが、後に盗難に遭っている。この、歴史との関わり在りようがいかに西吉野だなあ、と思う。

西吉野の不遇はまだ終わらない。大正八年（一九一九）、この地域の悲願であった鉄道開設を国会陳情することが決議された。五條から和歌山県の新宮へ、紀伊半島を縦貫する総延長120kmの鉄道計画。世に言う「五新鉄道」である。二十年を経て着工された工事は、間もなく戦争のため中断。工事再開の後、紆余曲折を経ながらも最大の難所である天辻トンネルの貫通にまで至ったが、平成元年（一九八九）、「五新鉄道」の建設はついに断念された。陳情議決から七十年が経っていた。現在はバス専用道として、一日数本のバスが路盤を走る。村史には、「世に言う〈幻の五新鉄道〉は、ことに西吉野村の人々に複雑な歴史と感情を刻み込んだ。世間では〈幻に終わった鉄道〉として語られるのであるが、村にとつては、軌道敷となる路盤が走り、いくつものトンネルと谷をまたぐ鉄橋まで建設され、鉄道ならぬバスが走っているから、単純に〈幻〉という言葉で表現できるわけではない。実用に供されながら、夢は挫折

したという、西吉野村の住民でなければ理解されたい感情がある」と記される。村内を縦貫する路盤。いくつものトンネルには草が生い茂り、獣でも棲んでいるのか、中からへんな声が聞こえることがある。そして、私の家からは天辻の峠を貫くトンネルと鉄橋がよく見える。よく見える、というより山を見れば山を出て峠に向かうその鉄橋が嫌でも眼に飛び込んでくる。この風景を紡いできた村の時間。その巖の深さを思うのである。

巖が深い土地とは、それだけ分け入ることのできる奥行きをもっている、ということなのかもしれない。興味が尽きない。そしてそれは、西吉野だけでなく他の土地にもさまざまにあるものなのだろう。私が大阪からこの西吉野に移住してきて、八年が過ぎる。この山村の自然の厳しさと力強さ、土地がはらむ陰影と奥行きを詠むには、まるで実力が足りないことを思い知るばかり。それでも、私は此所のことを歌いたい。巖深きこの土地が、私の現場なのだ。

賀名生皇居秋祭礼にひらかれて小暗き座敷にひとり物食む

なみの亜子

廃線と呼ぶな 軌道のなきままに峠つらぬくを五新線という

次号は来嶋靖生さんをお願いします。